

「煩惱と差別」

コーディネーター 小武正教さん
パネラー 信楽峻磨さん
小森龍邦さん

※ 「宗教と部落差別」の視点から、部落解放理論のさ

らなる構築をめざして、有志の呼びかけと協賛団体の協力により、「小森龍邦さんの対談を聞く会」が作られた。そして二〇〇二年六月二四日（月）、「広島別院別館四Fひろま」を会場に、呼びかけ人代表である信楽峻磨さんを対談相手に「煩惱と差別」をテーマに第一回の「対談を聞く会」が開催された。ここにその内容を掲載し、読者の部落解放理論の発展の一助となることを願うものです。

（第一回 小森龍邦さんの対談を聞く会

「煩惱と差別」 呼びかけ文）

「人間はなぜに同じ過ちを繰り返えそうとするのか」「それをくい止めるにはどうすればいいのか」、まさに

平和・人権の問題において古くて最も新しい、そして今差し迫った問題です。

今私たち市民の平和・人権が脅かされ、侵害されていく法律が次々と成立していこうとしています。また部落問題においても厳しいターニングポイントを迎えています。

仏教では人間の存在を「煩惱」と捉えました。縁によつてどのような煩惱も起こると自らをさらして生きていかれたのが親鸞聖人でありました。

親鸞聖人は連続無窮に、その自らの存在を自覚し、真実を求め願つて歩む人間が誕生していくと語つておられます。

それは言葉を変えれば、平和・人権を侵していく事柄を批判し、あるべき姿を求め・願う者が誕生しつづ

けるといふことです。

しかし現実には、平和が脅かされ、人権が侵害されていくことに対して日本社会も宗教教団も、全く歯止めがきかない状況があります。

濁流のような全体状況に対して無力感に陥る者、いやさらに疑問も感じることはない者、さらには積極的に時代の流れに身心を奪われて行く者がつぎつぎと生み出されています。

このような状況にあつて、仏教のいう人間存在を「煩惱」として捉えたその視点を外さず、そして現実の課題を担つて平和・人権の確立を求める実践的人間が連続無窮に誕生するということに焦点をあてて、小森龍邦さんと信楽峻磨さんのお二人に対談をして頂きたいと考えております。

小武 それでは定刻になりましたので、始めさせていただきます。だきたいと思ひます。第一回の小森龍邦さんの対談を聞く会に、こうしてたくさんの皆様にお集まりいただきました。公開として行わせていただきます。第一回という事で、どのような形に出来るかな、という事を多くの皆さんとご相談させていただきます。

多くの人に呼びかけ人になっていただきました。また同朋三者懇話会、そして同和問題に取り組む広島県宗教教団連絡会、更には真宗大谷派山陽教区同和協議会、広島部落解放研究所宗教部会、更に小森龍邦さんを励ます宗教者の会、多くの協賛団体の方にまた呼びかけていただきまして、今日こうして行なうことが出来ることになりました。

小森さんと信楽先生、これからは両方「さん」付けで呼ばせていただきたいと思いますが、小森さんと信楽さんとは非常に親しい間柄でありながら、こうして対談という形は初めてと聞いております。

また今日のテーマであります「煩惱と差別」という、こうしたテーマでの対談、これは小森さんと信楽さんというお二人だけの間だけではなく、このテーマで詰めた話をするという事は、あまり私自身も聞いたことがありません。それは今日の日本の状況、またそれぞれの教団の抱える状況、それらの状況に私たちがそれにどうやって歯止めをかけるか、またそれに対してやはり改革し、異議を申し立てをし、事を変えていく主体をどのように作つていけるか、そうした課題を考えます時、やはり「煩惱」という言葉で言い当てられた内容を深く皆様方と一緒に考

えていく事は非常に大切な事でなかろうか、というふうに思います。

私たちが「差別」という事を視点としながら、自らの煩惱とどう向き合って主体を確立していく事が出来るか、その問題を今日のお二人の対談の中で明らかにしていく事が出来れば、また一緒に同伴させていただけます皆様方と一緒にその事を考えていくことが出来れば、いうふうに思っています。

ご紹介が遅れました。小森龍邦さんの対談を聞く会第一回という事で、これからいろんな方と対談をしながら、部落解放という視点から現在の課題を明らかにしていただきます、広島部落解放研究所宗教会会長であります小森龍邦さんです。よろしくお願います。

そしてこの「対談を聞く会」の代表を引き受けていただきました、また今日の第一回目の対談者として一緒に話を深めていただきます信楽俊磨さんです。よろしくお願いたします。私はコーディネーターをさせていただきます部落解放研究所の宗教部会の事務局長しております小武正教と申します、よろしくお願いたします。



(今日の日本・教団状況を「人間主体」の確立という面より)

小武 それでは内容に入らせていただきますと思います。第一として「今日の日本社会の状況・教団の状況」という事を、お二人とも主体、「人間主体の確立」という事を一つの中心に据えて、今まで実践的な活動、または研究をされて来られております。日本社会の反動的状况を、人間の主体、更には自己疎外と

いう事で今まで明らかにされてまいりました。小森さんの方からその人間主体の状況という所の視点から、今日の状況を少しお話いただければと思います。

小森

皆さんどうも、今日はご苦勞様でございます。信楽先生とこういうふうに対談の機会をつくっていただきまして、かねてから先生の真宗教学に対する考え方を聞かせていただきたいとも思っておりますので、光榮でもありますし、また今日は大変勉強させていただくのではないかと、こう思つて出席をさせていただきました。

そこで最初のテーマについて、ごく簡単に申し上げたいと思います。「今日の日本の教団状況、人間主体の確立という面よりアプローチ」ということを、私は「日本社会の反動的状況と人間主体・自己疎外について」という意味に受け止めております。

今日の反動的状況と言うのは、様々な人権侵害について、これを「是」とする、「当たり前だ」とするような雰囲気は今社会を大きく動かそうとしておると、こういう状況でございます。端的に申し上げますと、昨日六月二三日は沖繩における組織的な戦争という攻防戦が終わつた日という事で、沖繩における戦没者の追悼式があつたようでございます。沖繩県

民の約三分の一がああの上で命を落とした。仏教が最も戒めております「殺生」という事から言いますと、もう戦争と言うのは途轍もない大きな殺生を行なう権力行使の場でありまして、何としてもそれは食い止めなければいかんと思ひます。またもうすぐ八月六日が訪れてまいりますし、八月九日も訪れてまいりますから、一瞬にして何十万人という死傷者を出した、あの戦争、どうしても避けねばならぬ。

私は戦争が負けた時は旧制中学の一年生でございましたが、それから一年、二年、年を重ねるに従ひまして、少年時代の私の脳裏をかすめたものは何かと言つたら、「人類はおそらく、もうこんな馬鹿げた事はしないだろう。第三次世界大戦という事はあり得ないだろう」。こんな気持ちで自分の将来・人生に対する一つの展望のようなものも持った訳であります。ついに有事法制でしょう。大政翼賛会時代の年配の方はご存知だと思いますけれども、あの大政翼賛会時代の国家総動員法に当たるものを今作ろうとしておる。

問題はこういう反動的な時期にいつたい「それが反動的である」という事を言つておつただけで物が

片付くか。立ち上がってこれと取り組まなければならぬと思うのです。

昨日も沖繩で小泉首相が追悼式に参加をして、何か格好の良い事を言ったようではありますが、しかし本場の沖繩県民の声は「あなたは今、有事法をつくっておるじゃないか。沖繩のこの身近な状況と同じような事を考えているじゃないか」と。こういう批判があつたという事をポロポロとマスコミも報じております。そこで私はこういう反動的状況に對しまして、主体的にこれと取り組まなければならぬ。権力の思うままに自己疎外状況に追い込まれていてはならない。自己疎外状況と言うのは自分が本来主張すべき事、人類が幸せのためにどうしなければならぬか、そこで自分がどういう考えを持って、どういふふうに行動をしなければならぬか、そういう事を十分に發揮する事が出来ない状況をいいます。いわば社会の重要な問題から人間の能力というものを蝕まれて、蝕まれるだけならまだある程度の事は仕方がないと思えますけれども、自ら好んでまたそういう人間の能力を蝕むような者の手助けをしたり、仲間入りしたりする者が最近増えてきております。

そういう状況を自己疎外と言うのでありますが、

その自己疎外の事について実は親鸞聖人の教えは、大変心を引くものがあります。私から言えば浄土真宗の教えと部落解放運動理論の發展を期して人間の主体を確立するという事で、一つ親鸞聖人からいろんな事を教えていただく。私として見れば部落解放運動と親鸞聖人の教えの統一的な發展を図ろうと思つて今日までやつてきた訳であります。

小武

有難うございました。今日の状況と、そして自己疎外、更には人間主体の確立という、小森さんご自身ずっと課題とされ、実践的な運動の中心に据えられてきた、その問題意識をお話をいただきました。同じ視点で信楽さんの方から日本の状況、また出来れば宗教教団、それは本願寺教団の場合になりますけれども、その人間主体という面から見てどういう状況として先生が捉えられているか。その事をお話いただければと思います。

信楽

こんにちは、本日はようこそ。今お話が進んでおりますように、小森さんと初めてこういう大変大きな「煩惱と差別」というテーマを巡って話をさせていただくことになりました。このテーマは私も非常に興味がある所でございます、喜んでここに参加した訳であります。これは我々本願寺の立場からい

たしますと、近世三百年、そして近代百数十年、部落差別を温存させ再生産し、教団がここまで来た。その事が、実は教団の体質・体制もさりながら、本質的には親鸞理解、教学理解の成せるわざであったわけです。この親鸞理解が本願寺の体制なり、体質なりを作ってきた、そういう意味で真宗学を学んでいる一人として、まさに大きな責任を、過去の責任もひつくるめて背負わざるを得ないと、日頃から思ってきた訳であります。そういう意味で、今日は小武さんのご苦勞で面白いテーマをいただきました。小森さんからそういう過去の現実の教団の差別という問題を厳しく問うていただきました、私がそれにかかわって、教学の側から煩惱という問題をどう考えるのかと、こういう形でですね、小森さんと私とで、時間が許すかどうか判りませんが、皆さんの嬉しいご質問も含めながら、この「差別と煩惱」という教団にとっては大変大きな問題、私自身の真宗学の根幹に関わる問題を、忌憚のないご意見を小森さんから頂戴しながら、私なりにまたそれに答えて、一つの方向でも少しでも出せるならと思つて、ここにおる訳であります。

もう一点、ちよつと弁明を申し上げておきますが、

初めてお目にかかった方も多いかと思いますが、私の教学理解は本願寺公認の教学ではありませんので、こここの所ははっきりしておいて下さい。

今日の本願寺の教学は、江戸時代からの伝統教学をそのまま守り続けて今日に至っているんです。近世三百年の、あんな様々な差別を温存して来た伝統教学。例えば、今印刷になつて公になつておりますが、龍谷大学には近世以来、大学が始まつて間もない頃からの教務日誌がある。その中を見ますと、もう徹底的な部落差別をやつてきております。

「同一に念仏すれば別の道なし」、「皆兄弟だ」という、『論註』の文章を講義しながら、部落出身の若い学生の席を別にしていゝんです。教学がどうして具体的にそういう問題点に気づかなかつたのだろうか。いや気づいていただろうと思ひますがね。真宗の信心がそれをよう変革しなかつた。伝統教学が教えた信心とはそういうものだった。

そういう信心が、戦時教学につなげて天皇と阿弥陀仏が同じだと、神様と仏様が同じだと、靖国と浄土も同じだと、戦死した者はみんなお浄土に参る。そんな教学を打ち立ててきました。この近世江戸時代の封建教学。近代の戦時教学を全く棚上げして何



ら問うことなく、しかもまたその人たちの教学を受け継ぎながら部落問題の運動を進めていこうとする、これはもう本質的におかしいんです。それは皆さんご承知の真俗二諦という、信心は信心、生活は生活、これを依然として続けてきているのです。親鸞没後以来、これをこのまま引きずりながらね「差別と煩惱」と言うテーマを議論したら、これはまた真俗二諦になつてしまふんです。そこで私は、そういう真俗二諦を早くから批判をしてまいりましたので、そ

この所は違う真宗理解を持つております。これを教団は「異安心」と言います。その立場から私はお話いたしましたので、色々分らない事があるかと思えますけれども、良い機会ですから、こういう私の意見も「あるんだ」というぐらいはご理解いただいても良からうと思えます。ともかく

そういう今日私自身の立場から小森さんと出来るだけ話を付き合わせながら、親鸞さまの本意、真宗の原点に立ち返りながら、「煩惱と差別」という所に私なりに焦点を絞つてお話を申し上げたいと思えます。

(信心の社会性と人間の主体)

小武 信楽さんの方から「教学」という視点から、今まで本願寺の差別を支えてきた、また死ねば靖国に生まれるという、そういう考えを支えてきた教学理解そのものが間違いであるという事を自分は言つてきた。その視点から今日は「煩惱と差別」という事、教学の立場で踏み込んでいきたい。

それから言いますと、言うまでもなく小森さんは「部落解放運動」という差別の現実の中から、親鸞聖人の教えに触れて来られたという事で、切り口がある意味では対照的なお二人でなからうかなというふうに思います。信楽さんが「早く『煩惱と差別』に入れ」と、こうおっしゃるんだらうと思うんですけども、もう少しだけですね、信心そのものとしての二諦でない教学。また信心そのものとして社会的な実践主体という意味での一つの接点というもの

が、実は「信心の社会性」という言葉で、いま本願寺教団の中では部落差別の問題を、また様々な私達一人一人が問われてくる問題に応えていこうという、動きが生まれております。これは「二諦を超える」という「真」と「俗」という、信心の世界とそして、それとは別の社会運動の世界を考えていく、そういう物事のあり方を超えていこうという事で「信心の社会性」という言葉があります。実はそれは同朋三者懇会から生まれてきた言葉であります。もつと言えば部落解放運動の提起の中から真宗教団に提示された言葉であります。その事を小森さんの方からちよつとお話をいただければというふうに思います。

小森

私のような社会運動する者が、もしこの親鸞の教えにおいて社会的視野を持たないという事になれば、これは全然関わりを持つという気持ちになれないのです。つまり社会全体として人々の平等、人間の持つておる生きていくその権利、そんなものを次第に社会に提供して皆さんに認めてもらって、みんな平等な生活が送れるように、そういう事にならなければ私にとっては親鸞聖人の教えは価値がないというふうに思うんです。しかし親鸞聖人の教えは、実はそこに対して非常に深い味わいを持って私達に教え

てくれているものがあると、こういうふうに思います。

私は幼い頃父親は兵隊に取られて、この広島第五師団に来ておったんでありますが、独立工兵隊という敵前上陸の段取りをする専門の兵隊でございました。さまざま敵前上陸の段取りをさせられた広島第五師団の独立工兵隊の兵隊であつた訳であります。したがって殆ど兵隊に取られている期間が多かつたために、私は父親と幼少の時代に丸ごと一年間一緒に生活した記憶はないのであります。母親がひたすら貧乏と闘い、母親にとつては生活のための仕事であつたと思いますが、草履をつくつて、私と弟を養つて育ててくれたのであります。

それで夜遅くまで私の枕もとで子ども二人が寝ている所を母親が草履をつくつておりましたが、つい母親の言葉から漏れて出るその言葉の中身はですね、「どうしてこう私は業が深いんかな」と、「業が深い」という事をよく言つておりました。それは現実の不幸せに対してやむなく受容しておる姿だつたと今にして思うのであります。何か「業」と言うのは、それは恐ろしいものだというふうに子どももの頃に思つておりました。成長いたしまして部落解放運動の先

頭に立つにしがいで、部落差別は宿業だと、業だと、こういう事を言う宗教者もおりまして、そんな人とも出会いましたので「これは業の解明をやらなければいかん」と、こういうふうにするようになりまして。それで「業が深い」と言うのは、私の母親のある意味では生きる自己を励ます、「挫けたらいかん。業ばっかりだから頑張らなければいかん」という意味もあつたと思う訳でありまして、業という事を次第に私は考えるようになりました。

しかし、ここで申し上げたい事は、母親が「業が深い」と言つて自分を励まして夜遅くまで草履をつくつて私を育ててくれた事に対しては、大変な共鳴と共感と言うか、母親の生き方においてです優れたものがあると私は思いますが、もし他人様から「お前は業が深いから部落に生まれたんだ」と言われたらですね、もうそれは徹底的に私は反発をいたします。業は言う人によつて、あるいは己自身の生き方の中の一つのエネルギーとして、生きる事の支えとして、そういう事を口走る事、ある意味では生き方としては、そういう生き方があると思ひますけれども、他人が言つたら腹を立てるといふ所にどういふ問題があるか。

ここで私は回り道をしたようでありませうけれども、「社会性」といふ事について思いをいたさざるを得ないのであります。「業が深い」、「業が深い」といふ事を他人から言われると、「何を言つておるか、君は差別を肯定するんか」と、こう言ひますが、確かにおじいさんの代から私の父親の代から、いろんな事が社会等の全体の関係において、今日の私の存在といふものをつくり出しておる訳でありますから、私は業を引きずつておると言うか、業を相続しておると、こういう事が言える訳であります。しからば業といふ特に仏教の非常に深い思想、それを他人からバンツと聞かされたら腹を立てる。じゃあ業の思想といふものをどういふ形で正しく受け止めるか。先達に色々哲学的深い所を聞かせてもらわなといけない。業といふことを書物の中に書いてある事とか、あるいは説教をなさるお寺さんの説教した方から聞いた場合に、私はすんなり聞こえるのは、どういふ時にすんなり聞こえるかと言うと、部落差別に悩み苦しむ悪戦苦闘しておる私と同じ地平に立つて物を言つておるか、あるいは高みに立つて物を言つておるか。「少しお前たち、かわいそうな立場だな」といふような哀れみの情を持つて言つておるか。哀

れみの情を持って言っておつたら「そんな事、言うてくれるな。私は嫌だ」と言います。しかし同一地平に立つて業をもし説かれたら私はすんなりそれは受容したいと、こういうように今考えるのであります。その同一地平と言うのが私がここで言う社会性の問題だと思ふんです。同一地平に立つという事は単に部落差別の事だけでなく、部落差別に深く思いを馳せて、これを徹底的に切りもみをして分析をしていくという事になれば、それは人間全体の社会に今生きておる人々の全体の平等を求める道に通ずる訳でありますから、そこで私はこの社会性という事の持つている意味を深く感じ取らせていただいております。

「だいたい信心と言うのは、自分の心の内面の問題だから」という事を言われる人がいます。先般、私九州で仏教の問題のこういう対談をさせてもらった時に、もう必死になつてそういう事を言われる人がおるのであります。「心の内面の問題であるから、社会の外への広がりという事は考えられない」というような事を言われる人がおられましたけれども、私は今のような業論の原点からそして社会運動する私が「なるほど」と受け止められる業論と言うのは、

やはり同一地平に立つて物を言われるそういう立場の人から学びたい。こういうふうに考えております。私の信心の社会性を主張する原点と言うのは、そんな所にあるという事を申し上げておきたいと思ひます。

小武

有難うございます。「信心の社会性」という事を今初めてお聞きになられた方もあるんだと思います。一つの物の考え方、思想がですね、例えば今日差別を助長していく、それをあおっていくような社会性という場合も一つはあり得る訳です。ただまた逆に今小森さんがおっしゃったように、同じ地平に立つて目線に立つて悩み苦しむ中で共に差別を解放していくとすると、そうした社会性もある。それで、御同朋という同じ地平に立つた「信心の社会性」という事を敢えて言わなかつたならば、「信心そのものと社会とは切り離されたものだ」というような考えをやはり突き破っていくことはできない。本来の親鸞聖人の信心というものに迫ることはできないという観点から「信心の社会性」という言葉が出てきたという事だけ、ちよつと付け加えさせていただきます。

じゃあ信楽さん、「真俗二諦という教学を超えてい



くという意味で信心の「社会性」という事を信楽さん
 どのように受け止めておられるか、それをちよつと
 お話いただきたいと思います。

信楽

今の問題ですけどね、これはキチツとして論文に
 書けば良いと思いますがそのままなんです、親鸞
 さんの書物を読みますとね、自分が救われることは
 そのまま世の人々が救われなければならぬ。いわ
 ゆる大乘仏教の立場ですね。一切の人々と共に自分
 の生きる道があると、これが大乘仏教の基本の原理
 です。「一切の衆生を救わずんば我正覚を取らじ」、
 これが基本の原理です。それが親鸞さんの書物の至
 る所に見えるんです。しかし、このことを江戸教学
 は殆ど無視して来ました。言わなかつた。これはこ
 案内のように、江戸の幕藩体制、権力体制はグルー

プを作つて行動する事
 を徹底に排除します。
 五人以上一カ所に集ま
 つて何か密議を起し
 たり、行動する事は全
 部取り上げて弾圧され
 ました。そういう長い
 封建体制に合わせて教

学自身が自らを自己規制をしてきたという事が歴然
 としております。

個々の事を申しかねますが、私が若い時に色々論
 文を書いておつたら、もう亡くなつた龍大の真宗学
 の教授が、「ちよつと来い」と言われて研究室に呼
 ばれました。私も大学の教員、相手もそうですよ。
 そしてね何を言われるのかと思つたら、「あんたの
 教学はね」、これはちよつとあまり具体的に言う
 ややこしくなりますから言いません。「江戸初期の
 教学の学者の考え方に非常に近い」と言われました。
 これはね日溪法霖と言う、龍谷大学の三代目の能
 化・学長です。この人は本願寺をキチツと批判した。
 批判した書物は今『真宗全書』の中に残つておりま
 す。厳しいこの人の学問に、「お前はそれによく似
 ておる」と言われてね、私は褒めてもらうんだと悦
 に入つておつたらね、最後「だからけしからん」と
 なつて、私はビツクリした。

今的一点でお解りになるように、江戸初期の教学
 は、比叡山などのいろんな学問を身につけて親鸞を
 読んだために非常に幅の広い、そこでは大乘の原理
 が見事に捉えられているんです。ところがね、それ
 がだんだん中期、後期になるとね、これは権力がの

さばり、何度も幕府から弾圧を受けています。そのため自己規制をしてまいりました。「往生は自分だけのこと。我一人で事が済むんだ」という発想になつてまいりました。他者との関わりを様々に切つていきました。これを支えた論理が蓮如の論理です。蓮如の「御一代問書」の中に、「往生は一人のしのみならず」「しのぎ」という表現がまた面白いですがね。「往生は私一人で事が済む、他人の事は関係ないや」という発想です。これがずーっと生きてきたんです。

そこでそれは最近の事ですが、ある本願寺の人が言いました。「我々の宗会議員で『信心の社会性』というテーマで勉強会をしようとした。ところがあつた大物の教学者に頼みに行つたら、『信心の社会性なんて、そんなものあるか。信心は蓮如が言つたように一人しのぎや。信心には社会性などない』と言われたというんです。これ数年前ぐらいの話です。そしてね、またもう一つ最近本願寺から『信心の社会性』という本が出ております。バラバラと捲つたんですけどね、この人は、先年亡くなられた桐溪順忍氏の教学にしたがつて真宗信心を理解するといつて『信心の社会性』を論じていらつしゃいます。

「真宗の救いは来世が中心で今生はそれが約束されるだけだ」、という一貫した真宗理解を持つていらつしゃいます。これは江戸宗学がずーつとそうです。この人に私は習つたんです。いつも言われた事は、「真宗の救いと言うのは、土曜日みたいなものだ」と。どういう事かと言つたら、今は土曜日でも休みになつたから話がおかしいですが、だいたい我々は真面目に土曜日まで学校に行きよりましたから、「土曜日になつたら明日日曜日でホツとするだろう」と。「私が小さい時に正月が近づいたらね、親の言う事をよう聞いたもんや。『正月には小遣いをやる』と言われて辛い事もがまんした。ちよつど真宗のお救いと言うのはそういうものや。来世があると思えば、どんな苦勞も忍んでホツとする。来世に全てをかけた今生を生きていく。これが真宗の救いだ」と。私たち学生は、この人のその話を「土曜日の論理」と呼んでいた。大学の教授の講義ですが、私たちはそんなものに付いて行けません。「土曜日の論理」といつて盛んに冷やかしたもんです。しかしこの「土曜日の論理」はご案内のように、マルクスが言つた「宗教はアヘンだ」という論理そのままですよ。「明日があるから、まあ我慢せよ」という。この人

はこの桐溪氏の信心理解にしたがって「信心の社会性」を論じられています。こんなもので社会性という事は成り立つのか。これでは観念か、あるいはよく言っても二諸論でしょう。これが今日の本願寺教団の現実です。あまり言うのと、また批判されるけど、言わなければ解らん。言わなければ解らんから言っておるんですけどね。これではどうしようもない。親鸞様はそんな事をおっしゃってますか。親鸞様の信心の味わいと言うのは「土曜日の論理」ですか。これは違います。そんなものでありませんよ。もつと生き生きとしたものです。「土曜日の論理」のよいうな、そんな古い論理を持ってきて信心の社会性を論じたって、これはどうしようもないじゃないですか。

（「煩惱」をどのように受けとめることから、いつそう「差別解放」「社会変革」に向かう人間が誕生するのか）

小武 だいたいお二人の考え方の視点、小森さんはそうした同一地平、信楽さんは大乘仏教共に救われていくという、そうしたそれぞれのお考えの中で今まで真宗を捉えてこられたという事が理解できたように思います。この視点をベースにしながら「煩惱と差

別」という事を論じていたのだきたいという事であります。「煩惱があるから差別がなくならんんだ」という言い方を今でもされる人があります。また「煩惱があつても差別はなくなるんだよ」という、そういう考え方をする人もあります。もつと別な言い方をしますと、親鸞聖人のお言葉として「煩惱具足」という言い方がありますね。「全ての煩惱は私の中に具わっているんですよ」ということですが、それをこういう言い方は出来るでしょうか。「煩惱具足の自己と自覚するから差別解放に向かつて、ますます進んでいけるですよ」と。

私は今日お二人の方にそこを突き詰めていただきたいと思っています。消極的に「煩惱があつても差別解放に向かう」と言うのか、「煩惱を具足する」と言うからこそ、ますます差別解放に向かつて行けるというかというところへんです。ここからはズバリ今日の核心の所だと思えますけれども、小森さんの方から先ずお話をしていただきたいと思えます。

小森 非常に難しい所へさしかかりました。ご承知の通りであります。親鸞聖人の言われた言葉という事で私どもには伝わってきておりますが、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもつてそらごとたわ

ごまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」という言葉がございませう。私はお互いのこの社会と言うか、世間は大変煩惱に捉われておる社会だと思っております。その煩惱に捉われておるから、先ほども信楽先生の方からお話ございましたように、真宗教団においても、あるいは江戸時代からの龍谷大学において、その学問所において差別が行なわれてきておつたと、こういう事のようにございませう。

私は「煩惱」と言うのは、後ほど信楽先生から色々批判もいただきたいと思つし、ご口授もいただきたいと思つんですが、これは人間が人間である限りにおいて、煩惱から完全に解放されるという事があり得ないだろうと、そういう気持ちがあります。何故かと言うと、非常にしつこい差別に出会つた私の人生体験のようなものから、そういう意味では人間の今のあり姿そのものに対しては大変な不信感を持つております。しかしながら親鸞聖人はあの「正信偈」の中で、「不断」「不断」とは断たず、切らずという事です。煩惱を断たずして涅槃を得る」と、こう言われておる訳であります。煩惱との関係においては、煩惱を断たずして涅槃を得る。煩惱が

様々な差別的なこの世間の動きを引き起こしておるんだけれども、その煩惱そのもの、つまり人間の持つて居る一つのこれは性質だと思つますが、それを断たずして涅槃を得る境地を仏教は教えてくれておる。こういうふうに見えるのであります。

私はこれは仏教が教えておる所の「縁」の思想、要するに「これあつてこれ生ずる。これなくしてこれ滅つす」と、こういう関係のものだと思つのであります。要するに現在の社会の仕組み、これは仕組みと言つても全体の仕組みは経済構造という事が私の頭にある訳であります。その経済構造の反映として大きな教団がでたらめを言つたら、それもまた社会に大きい影響を持ちますから、それもまた次第に仕組化されたものの概念の中に入つていくと思つのであります。

今のようにリストラ、首切りになつて構造改革をする事を当たり前だ、「構造改革なくして景気の回復なし」と、でたらめな事を言つて年に三万人以上の人が自殺に追い込まれる状況があります。賃金はたつたこの間まで五十万円をもらつていた人が三十万円に切られる、「氣に入らなかつたら辞めなさい」と。そして失業率はどんどん高くなる、消費購買力

は落ち込んでしまふ。こういうふうな状況では人々は江戸時代さながらの「上見て暮らすな、下見て暮らせ。上見りゃきり無し、下見りゃきり無し。何事も諦めが肝心」と。こういう形でいわゆる江戸時代の「士農工商エタ非人」。これは安芸の方ではエタ身分のことを「革田」と言いましたけれども、「士農工商エタ非人」という事で、「ああ、あの家の身分に生まれなくて良かった」と、こういうふうな考え方がずつと広がっていると、こういう事になる訳であります。したがって、「煩惱を克服」といっても完全には克服できないと思えますけれども、しかし社会を少なくとも平等の方向に前へ向かつて行ける程度の所までは、私は何とかなるのではないかと、こういう考え方をもちます。

そして、それが究極、仏教の解脱とかですな、涅槃を得るとかですな、あるいはどう言いますか、等正覚と言うんですかね、仏さんと同じような状況になるといふ境地は、また更に更に深い境地であると思えます。その次元の問題という所まで行かなくても、世間一般の私どもが社会運動の対象とするような次元においても、「煩惱を断たずして涅槃を得る」と言うのは私にはピンと来るんです。

私は煩惱というものは社会の状況によつて、非常に激しく揺れるものであると思えます。たったこの間まで部落解放と言っていた学校の先生方も、そして町内会の皆さんも「部落解放はやらなければいけない」という事で認めてもらつておりましたが、政府が今のような経済状況の矛盾を表面を隠していうという事になると、差別根性というものを煽らなければなりません。そういう時にはまたそつちの方にガーツと流れていくと、こういう事になります。非常に大雑把な煩惱に対する私の理解であります、信楽先生からその所を説明していただければ大変有難い事だと、こういうふうに思つております。

小武　じゃあ信楽さん、いまの小森さんの煩惱と涅槃の受け止め方で、煩惱を制御するという、やはりその視点もちよつと入れながらですな、お話を続けて下さい。

信楽　これから申します事は、多くの方はご承知かと思えますが、何年か前に本願寺の門主が御巡教で北陸の方においてになった時に、その地方の住職と懇談会をされていたその席で、ある住職が門主ならびに本願寺の当局のお偉いさんが並んでいる前で「質問します」と言つてね、こういう事を言つたんだそう

です。「本願寺はいつから聖道門に変わったのか。」という切り出しで「本願寺は我々に差別を止めろと言うが、差別と言うのは煩惱だろう。煩惱を止めろと言うのは、これは聖道門だ。浄土門、真宗の教えは煩惱のままでお救いをいただと我々は頂戴しておる。さすれば我々の真宗の教えは、煩惱のままの救いだから差別を止める事はないじゃないか。いたい本願寺さん、どう考えるんですか」と、そういう質問をしたんだそうです。そしてらね門主以下誰も返事をしなかつた。黙り込んだ、それで終わってしまったといひます。それでその地元の僧侶は後から「よう言つた」と言つた。これはこういう真宗教の理解がベースにあるんですよ。その話をめぐってこれからちよつと申します。

浄土真宗、特に西本願寺の教学で「信心」と言うのは多くの方ご承知かと思ひますが、二種深信という事を申します。元は中国の善導大師がもうしたことです。一つは機の深信、そしてもう一つは法の深信。これは簡単に言うると「私と仏」、この二つについて深く信じる事だということ、この二つの關係をどう理解するかという問題です。これは伝統的な今の西本願寺の教学の主流を成しているものは、こ

れは「法」、「仏」の側にアクセントをおくという解釈です。具体的に例え話があるのです。有名な例え話でお説教でお聞きになつた方があるかと思ひますが、船に石を乗せるといふ話なのです。これが真宗の信心の基本の仕組みだと言ふのです。この石と言ふのが「私」です。「機」。それから船が「仏」、「法」です。石は船に乘せられても沈むという、自性・煩惱をいっぱい持つていふという自性は変わらない。しかしその沈むべき石を浮かせる法の仏の救いが偉大なために石を浮かせていふ。こういう事です。これが二種深信の基本構造だと、こういう訳であります。これは現在の西本願寺のそうそうたる学者、何人もがこの事を真宗の信心の理解の説明でおつしやつて、今も本屋でそう書いた本を売つていふと思ひます。

明治の初めに東陽円月という大分の学者がおりましたが、本願寺でこの二種深信を批判したんです。そしたら、二種深信を批判したために彼は講義を停止され「もう辞めろ」って途中で引き摺り下ろされて、彼はそれから大分に帰つて自分の塾を開いて多くの弟子を育てたという人がおります。そういう意味でこれは、かなり問題の所なんです、今もこの

説は主流としては生きております。だから私はどなたが富山で質問をされたか存じませんが、その話を聞いた時にサモアリナンと思つた。この論理から言うならば、石の自性は変わらない、煩惱を持つたまま変わらないけれども、お慈悲が救つてお浄土へと往くことになる。だからこれでは、楽ちゃん楽ちゃんという話になる。それで今申し上げた東陽円月という人は、この二つの関係は信心が成立する時には二種と言つても、信心が成立した後はもうこれは法の深信だけじゃないか。「機の深信、地獄一定」という発想がないと批判したわけです。

しかし、今日の本願寺教学における普通の信心理解はこういう理解なのです。「その身そのままのお救いだ」というお話はよくお聞きと思いますがこれがそれです。「その身そのまま」と言うのはどういう事かと言うのは色々説明はしますけれど、きつちり詰めて言えば、私は何も変わらなくても良いんだと。煩惱のままのお慈悲一つのお救いだ。こういう話です。

そこで、今日の基本のテーマです。「差別を止めよう」という事になると、差別を煩惱として捉えるならば、ここの所をどう解釈するのか。この基本的な

問題をこの任職は門主に突き付けたわけです。それには本山は何も答えなかつた。

難しい所なんです、基本的にね「差別は煩惱だ」とキチツと捉えてね、そしてこの煩惱を信心はどう処置するかという論を展開しない限り信心の人の生活、社会的実践と言うのは生まれてきようがないのです。信心の社会性と言つてもね、このような信心理解をしておつたんじゃ社会性にはならないのです。

そこでさつき小森さんがおっしゃつた「不断煩惱得涅槃」という、この話にもひつくるめてちよつと申し上げたいんですが、「正信僞」の中に皆さんご承知かと思いますが、この今の「不断煩惱得涅槃」という所ね、その直ぐ隣に「撰取心光常照護、已能雖破無明闇」という言葉があるのをご承知でしょうか。ここには真宗者が信心においていただける御利益が五種類上げてあるんですね。「不断煩惱得涅槃」という、これが一つです。もう一つはその次の「如衆水入海一味」。お念仏に生きる者はみんな一つ味わいになる。どんな泥水も綺麗な水も海へ行つたら、みんな同じ塩っ辛い一つの水になる。お念仏に生きる者はみんな一つなんだ。いわゆるさつき申し上げた「論註」もそう言っている。同じ道を生きるもの

の同行同朋の原理がここにある訳です。これ二番目。そして三番目に今申し上げるこの話が出るのです。

これはね「撰取」と言うのは仏様が我々を救うという事ですね。「心光」と言うのはご承知のように、光明を「身の光」と書く場合がありますが、「心の光」と書いた場合は、これは仏様が私達を救う働きを言っているんですね。「身の光」と書いたのは救われる前に我々を育てていく光。こういうように親鸞さまは理解しています。この場合はもう「救い」を言っている訳ですね。そして「無明の闇を破す」と「雖も」ですね。この問題です。これが仏様に救われたという事ですから信心の利益です。信心そのものです。信心をいただくならば無明の闇を破すんです。「無明」と言うのは煩惱の一番根幹を表すものです。そうすると申し上げたいのは、信心をいただいたらどこかで煩惱が破られる。「破る」という言葉の意味がまた大変深い意味がある。ところが本願寺の理解は、無明という所を煩惱と解釈しないんです。したらややこしくなるから。「うたがいが」と解釈をしているのです。意訳聖典の文にも「うたがいが」と仮名をうっています。この意訳は戦後に作ったのですが、江戸時代から「無明」と言うのは「うたが

い”の事で”煩惱“の事ではないと言ってきたんです。しかし「煩惱」と言うのは、これは色々たくさんある。ご承知のように八万四千ともいいますし、基本的には三毒の煩惱ともいいます。その一つは怒りです。二河白道では火の河になっています。それからもう一つは貪り。二河白道では水の河になっています。この火と水、怒りと貪りこの二つが基本の煩惱だと、こう言います。それを成り立たすものは、もう一つその底に無明という煩惱がある。無明と言うのは道理が解らない。私たち一人一人生きていくんだが、一人で生きるはずはない。様々な関係の中で我々の生活はは成り立っているんだけれども、我々のものの考え方はいつも我執・自我、「俺さえ良ければ」と考える。これが一番基本の煩惱の根だと。それを「無明」と言っているのです。ひっくり返せば我が良ければ他人はどうでも良い、これが根源の煩惱だ、迷いだ。これから出てくるから自分にプラスになるものは皆引き寄せろ。「こっちへ来い」と言っただけで。自分に役に立たない、むしろ邪魔になるものは「あっちへ行け」と言っただけで出しちゃう。怒りになる。怒りと貪りは「我がかわいい」という、この無明に基づくのだ。これが仏教の基本

の理解です。

今は「無明の闇が破れる」と、こう書いてあるんですね。破れるけれども、まだ煩惱が出るという、それが非常に深い親鸞の現実的な解釈です。一遍破るんです。破るんだけれども、次々出てくる、こういうような文章になりますね。しかし一遍破れたら、どれだけ「雲や霧が多かろうとも太陽がもう出た以上は、雲がどれだけ厚かろうとも雲の下は明らかにして闇なきが如し」と言うのです。「雲霧之下明無闇」はもう闇がないといえます。これは親鸞さまの非常に深い体験から出たものです。この言葉はそれ以前のどこにもありませんよ。

親鸞さまは「無明」という言葉を多く用いますが、それを「疑い」と解釈した所はありません。皆「無明・煩惱」とおっしゃっている。煩惱と無明が一つなんです。だからこれは煩惱の事を言っているのです。煩惱を破るんだけれども、次々と煩惱の雲と霧がかかってくる。という親鸞さまの深い嘆きの言葉です。こここの所に私たちがどれだけ佇んで現代を生きているかという問題がここに見事に出てるのです。親鸞さまは、だから八〇歳を過ぎて「私には信心はない」と言ったじゃないですか。

人に信心をあれだけ進めながら。これはね「教えに生きる」と言うのは、そういう矛盾に生きる、光を浴びれば浴びるほど影が映りますからね。それも承知で仏法を学ばなければおかしいですよ。

私は親鸞さまが信心とは無明を破る事。無明、煩惱を破る事、転ずる事。この「転ずる」と言うのは微妙な所です。それが今の「不断煩惱」に関わるんです。煩惱を断たずといったって、煩惱がそのままストレートに悟りじゃないです。結論を言うならば、信心に生きるという事は何らかの形で限りなく煩惱を破り破りして生きていくという、そこに新しい人間主体が初めて成り立つんです。船に乗せられ楽ちん楽ちんで、なぜ主体が成り立ちますか。自己の責任を担ってスクツと立って、阿弥陀仏の本願に向かって、本願に向かってキチツと立って、自分の生き様を明らかにしていくという事は、この船に乗った話では成り立ちません。どう煩惱を断ち切っていくか、転じていくか、破っていくかという、この大きな命題が念仏に生きるいう事以外の何ものでもない。小武 どうも有難うございました。常に信楽さんの心に思っておられる事をお話いただいたと思います。無明という事は差別だと。「差別は煩惱だ」という言



小森

葉に置き換えて考えますとですね、今おっしゃった「破り破り」という言葉を、差別の心を破り破りというふうに受け止めて良いのかなと思いつながら聞いておりました。また「転ずる」という言葉も差別するその心を転じ転じと、そういうふうにも受け止められるんではと思います。それでキーワードが「転ずる」、「破る」ということとして、煩惱、そして差別という事をお話をくださいました。ではその事を小森さんに現実の差別の場で差別心というものがどう転じられていくか、また起こり続けてくるものか、その事について信楽さんがお話をくださった教学の部分を現実の視座からお話をいただければと思います。私の考え方というものとかかなり共通をしているな

あという思いで聞かせていただきました。しかし、なお学問的に私の言っている事がどこまで理論的に正しいのか、正しくないのかについては、また若干の不安も持っておりますよう

な訳でございます。

私の考え方からいきまして、要するに社会が現在直面しておる様々な矛盾、その矛盾に対して経済の運営をしておる、いわば経済の実権を握っておる主流の方々と、その政治的な反映と言うか、その政治的な代弁者たちがいろんな事をやっておるその事に人々は影響されまして、この影響されるという所が「縁」という所でありますが、それで結局これだけ経済が行き詰まってきたと、みんな今まで何十年も同和問題について啓発に参加してきたのにコロリと一日、二日で態度を変えてしまうと、こういう所に現在我々は直面をいたしておる訳であります。そこで要するに煩惱は縁によって揺れ動くという事を申し上げた訳であります、先ほどの先生のお話の中に「已能雖破無明闇」、そこを私もちよつとつかり読んでおりましたが、「已に無明闇を破すと雖も」という、この「雖も」という所をですね割り合い私は軽く読んでおったんですが、非常に大きな意味があって、しかも私がいったんは検証的に見たら差別心を克服したかに見える学校の校長さんだが、少し管理を厳しくされると、直ぐ手のひらを返して別の事を言うようになると、これは特にですね「君

が代」問題を持ち込まれてきてから校長さんらの変身というものは目に余るものがあると言いますが、大変な状況なのであります。だから検証的に言ったら戦前・戦中と同じような事を平気で言うようになる。しかしながら、それは戦争中と全く同じなのかと言うと、実はこの人たちは後ろ髪を引かれるような思いで、嘘と承知しながら子どもたちにいい加減な事を言っておるといふ事です。だから「君が代」を歌う時に子どもたちは誰が音頭を取るといふ訳でもないが、「たったこの間まで一緒に歌っておった歌と違うじゃないか」と言ってお、「起立」と言っても、校歌を歌う時には起立しておるけれども、「君が代」の時にはパツと座ると。こういう感じになっておるんだらうと思っております。したがって「已能雖破無明闇」は無明・煩惱を破った後、揺れ動くかも知らないけれども、それは決して前と同じではない。そこに要するに大きな変化と言うか前進の跡が見れると、こういうふうな社会運動をやる私とすれば、いま信楽先生がお話になった事を聞き取らせていただいた訳でございます。

それで「主体」の問題であります、そういう揺れ動くと言うか、現象的に見たら「また五〇年前と

同じような事になっているじゃないか」というように見えるかも知らないけれども、そこには確かに変化とか、前進とかというものがある訳でありまして、その変化と前進を齎す人間としての努力・務め、そこが主体だと思っております。

したがって私は最近、部落解放同盟広島県連合会、この連合会において学習活動を提唱しておりますその中に、「人間のありよう」という事を強く提唱しています。人間というものがどういふふうな社会に向かつて己自身がその支配を受けながら、その支配を克服して人間平等というものを實現する境地を見つけていくかと。そういう「人間のありよう」の事を言っておるのですが、レジユメの中に小武さんは「何故マルキストの小森さんが親鸞を語るのか」と、こういうテーマを出していただいております。私は果たして本当にマルキストであるかとこれは私自身、あまりはつきりした考え方を持っておりませんが、しかしマルクスの説いた哲学的なもの考え方に相当大きく影響されている事は事実でありますから、そういうものを含めてマルキストと言えば、私もマルキストの一員であるかも知れないと。しかし長らく社会運動をやってまいりまして、色々

社会変革のために知恵を絞ってまいりましたが、私も一番最後の辺りでは三〇数年間の社会黨員であったその状況から一転して党を除名されてしまった。それはご存知のように小選挙区の問題に始まって、消費税の問題。「三%ならダメだが五%なら良い」という党の決定には、どうしても私は従う事が出来なかつた。あれほど戦争放棄、あるいは政府による武力行使というようなものを絶対に禁ずるとなっている憲法を守るといふ立場に立つ党の方針を私は守り続けたいと思いますから、自衛隊機を海外に飛ばす事に反対した。そこでついに私は除名という事になつてしまつたのでありますが、結局私は何党であれ、単純にこの社会の分析とか、社会科学の言つて社会科学的分析するだけでは、そこに人間として歩まねばならない深い味わいというものを普遍化する事は出来ない。こういう考え方に到達をいたしました、そして兼ねてから業の問題なんかを考えさせられて来ておりましたが、特にこの私の生涯のうちの一〇年とか一五年の現在に至るまでの間においては、親鸞聖人の教えられるところから学ばなければいけないと、こういう気持ち強く出しておるのであります。それが私が言う所の本当の人間の主体を鍛え

る道である。こう思つておるのであります。

極端な言い方をさせてもらいますと、マルキストの一員かも知れないけれども、マルクス主義の中には「卯の毛・羊の毛の先にいるちりばかりもつくる罪の宿業にあらずといふことなしとしるべし」といふ深い境地はないですね。それから「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」といふ、こういう深い境地はないですね。その深い境地と現実に恥知らずな社会の運営をしておる連中の矛盾というものを鋭く指摘をして、この改革を迫ると。それには当然先ほどお話がございましたように機の信心、法の信心と言われる「己」、己自身というものをどう見るか。煩惱具足の凡夫と見抜いて、そこに絶えまなく自己分析をしていくという事が加わらないと、この社会の矛盾を解決して前に進む事が出来ないと思ふわけです。とても部落問題という何百年の歴史をこの肩に背負わされて、この社会矛盾を解決して前に進む事が出来ないところから考えであります。これが私の「主体」に対する考えであります。しかし言葉で言うのは比較的簡単であります、これを部落解放

同盟員のみんなに腑に落ちるように言うという事は容易ならざる事ですし、いわゆるその周辺で民主主義とか、人権とかという事を真剣に考えておられる方々に、本来の意味で仏教的用語で言う所の視点を領解をしていただくという事は難しいことだと思っております。

小武 有り難うございます。お二人の言葉の中で、今小森さんの方からは煩惱が「揺れ動く」という言葉として、また先ほどの信楽さんの言葉で言えば「破られていく」という状況をお話をいただいたと思えます。私、最初に何故「親鸞聖人の積極性」という事を申したかと言いますと、破られていく事の中でこそ、初めて差別と言うのが本当に解放されていくものではないのかという所にまでお二人の話を突っ込んでもらいたいという思いがあります。そのためには「煩惱」という事を、もうズバリ差別する心「差別心」という、先ほどの信楽さんの言葉をいただきたい、もう「煩惱」と言わずに「差別する心」が縁によって起こり続けてくると。「煩惱」という「もの」があるのでなくて、縁によって先ほどの貪欲や、怒りや、愚痴の言葉が出てくる訳ですから、関係の中で「煩惱」と言うのもある。関係の中で差別する心

というものが起きてくる。その事が破り破られ続けていくという事を、先ほどの言葉で言えば「不断煩惱得涅槃」の自分自身の受け止めだということを、今度は信楽さんの方から、次に小森さんの方からお話をしていただければと思います。

信楽

いま小森さんがおっしゃった所、私も重ねてその辺り、煩惱を破るといふ、その所で引つかかる問題ですが、もう少しちよつと教学的な所を申しますとね、ご承知の方が多いと思いますが、真宗で信心の事をその位を「不退転」と申すのはご承知でしょうか。あるいは「正定聚」とも申しますね。この問題が今小森さんがおっしゃられた破り続けていく、新しい煩惱が生まれながら破り続けていくという、そこに非常に深く関わる親鸞さんの理解です。親鸞さんも同じように今小森さんがおっしゃった所と全く同じような事を、彼自身が体験的に理解していった事が解るのです。もうちよつと理屈っぽく申しますとね、「凡夫が仏になる」、つまり成仏する。この「なる」という事が仏教の基本なんです。真宗の親鸞さまは「なる」という事を何度もおっしゃるんです。なつてはいない私が少しずつなつていく。充実していくのですね。実がなつていくように、なつて

いくのです。なつてはいないんですけれども、それが仏法を学ぶ事であつていくと申すのです。その「なつていく道」が仏道・念仏の道だ、こういう事なのですが、これは少し抽象的に申しますと、仏道には五二の段階があるという事をお聞きになつた方があるかと思いますが、初めは最初の頃はお釈迦様と同じ位に至るためには、四つの段階があると言つたのです。しかし、後世になると、だんだんだんだんそれが多くなつていくんです。だいたい歴史と言ふのは、そう言うものです。それが、最後の段階では五二の段階までいくんです。そこで下から四一段目が、これが初地という位です。それでこの位、これもいろんなインド、中国の説があるのですが、親鸞さまが理解する所を見ると、この四一段目の所に來たのが「不退転」。「もうバックしない」と言う位です。煩惱を転じると言つたけども、ここまで來てもやっぱり煩惱は残つて居るのです。しかし、この四一段目でもうバックしない。逆に言うなら定まつた仲間、もう仏になる事に定まつた位。これを親鸞さまは「正定聚」と申します。このように信心に至るには、四〇段を進んでいかないといけない。こういうようにプロセスを語るのですね。

いま小森さんの話に乗せていうならば、我々は様々な無明・煩惱を抱えて生きていくんですが、仏道を学ぶ所でそれを破り転じ転じていくという、その方向の中で信心が本當に成立していく。ある一定の所に行つたらもうバックしない。まだたくさん残つて居るんです。残つて居るのだけでも、「これが一つの到達点だ」という事を言つてきた。従来のインドや中国の、あるいは法然までも含めて「ここまでが勝負だ」という発想が非常に強かつたんですね。しかし親鸞さまは、また面白い事をおっしゃる。信心の人は「五一段目のね等覺の位まで行くんだ」と、こう言われるのです。妙覺と言ふのは悟りの事。仏の悟りの事を妙覺と言います。これが最上の五二一段目に当たるんです。ここがもう最終のゴールです。その一つ手前の、だから「覺に等しい」。「等しい」と言ふのは同じではないんです。やっぱり違うのです。「ここに至る事が出来るんだ」と言つて居る。それを丁寧には「等正覺」とも申します。

それはさっきの「不断煩惱得涅槃」の所に出てくる話でちよつとその前に「成等覺証大涅槃」と出てきますね。この「等覺を成ずる」、ここで切るんです。この世で等正覺を成る。そして死んでから大涅槃

榮という本当の悟りを得るんだとこういうように親鸞さまは理解いたしました。もういよいよギリギリの所まで信心の人は「等覚を成ずる」と言い切ってしまう。

しかし、もう一つ、ご承知だと思いますが、親鸞さまの晩年の「一念多念文意」では、さっきの無明と煩惱です。無明と煩惱が親鸞さまは同じなんです。「無明・煩惱我が身に満ちて欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこころおほくひまなくして臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと水火二河のたとえにあらわれたり」。いわゆる臨終の一念までやつぱり消えないんだといいますが、しかし、消えないんだけど、信心に生きる事はそれを破り破りしてもう最終まで行くんだという、そういう事を言っているんですね。親鸞さんのこの発言は今まで法然も言わなかった事を、親鸞さんは言い切っているのです。ここの所で信心の人は「仏になるべき身になる」と二遍「なる」という字を使っておるのです。

これをね伝統教学はそういう身分、資格をもらう事だ。こう解釈するのです。しかし親鸞さまはそんな事は言っていない。「身」と言うのは、日本語では

非常に深い意味を持っている言葉です。例えば「わが身に引き寄せて」というでしょう。この「身」と言うのは、まさに「主体」ということです。そういう人格主体に育てられていくのだと、煩惱をいっぱい抱えているんだけれども、それを破り破りして生きていく身になるのだと。その「身」と言うのは、大和言葉の古い言葉なんですがね、これは今申し上げたように日常用語でも使ってますね。「身」と言うのは、「人格主体」という事業に重なるかと思えます。

小武

有難うございます。いま最後におっしゃっていた「身になる」という、要するに煩惱が破られる、差別の心が破られると言うのは、関係が変わっていくと、関係が破られる、そういう言い方をするとですね少し皆様方にまた別の角度からお伝えできるんじゃないかなと思うんですね。自分と他者とのそういう上下関係とか、配慮の意識とか、そういう中身が煩惱・差別ですね、今日お話している。それが破られ破られですから自分の心だけが変わっていくのが「煩惱が破られていく」という事ではないはずですね。それが破られるのは関係が破られていく訳ですから、関係が変わっていくという、その事が

実は今信楽さんがおっしゃった「身になる」と言うこと。自分だけの「身」ではなくて「共に」という、そういう意味を含んだ言葉として今お話いただいたのではないかなと言うふうに思います。ではさらに小森さんの方から実践的な所でその「破られていく」という所をお話をいただきたいと思えます。その中で差別・被差別の關係がどう変わり続けていくのか、どういう積極的な意味があるのかという事をちよつとお話をいただきたいと思えます。

小森

あの「煩惱」を「破る」と言うか、その所を少しずつ克服しながら、すんなりとは前に進まない。こういう人間の姿をしばしば現に見てまいりました。私はずいぶん若い頃の話であります、学校の先生方の事で例の勤務評定で反対闘争がありました時に、私の町の広教組の支部長をしておった人の事なので、かなり県の教育委員会とか、市の教育委員会と対立をしました。「下手をすると処分を食ってですね、この広い県内には校長を降格された者もおるし、惨い目にあわされた者もおる。解放運動をやっている処分の対象にならない私ら同盟員がきつい論理を展開するから、先生少し私らの後の方でおってください」と私は言った。しかしその先生は、「私は

いっこうに構わない。私は正しいと思う事を主張しておるんだから、元より処分される事があるかも知らんという事は覚悟しております」とおっしゃった。月日は経ち、その人はもう現在八〇歳を越えています。しかし現在の部落解放運動なり、あるいは教育のあり方について当時の根性と言うか、気持ちから一歩も下がってない。

ずつと、変わられていないですね。その主張を意地でもとおすと言うか、そんな感じの人間像を私の直ぐ近くの方ですけれども、私は知っておるのであります。つまり先ほどの話、信楽先生の話の中にありましたようにですね、ある一定の所まで行ったら、そこから下がらない。不転の境地の辺まで到達された人間の姿でないかと思っております。

しかし、今日言った事と明日言う事がもう違うという人もいます。しかし、それは一つのプロセスと言うか、段階と言うか、そういうものとして捉まえるべきではないかと思えます。つまりそういう人も大きな目で見ると、今日言っておる事が正しければ今日の段階では我々の味方であります。明日裏切るというような事は「縁」によってそうなるのであります、今日まともな事を言っておれば、それはこ

ちらへいただと、プラスとしていただと。こういう気持ちでそういう人達の動きを見えています。

四〇歳ぐらいの人が四〇年も経って尚その信念を曲げずに来ます深めて行かれています。おそらくこの人は死ぬるまで妥協しないでしょね。「社会悪を追及する」という論理では妥協しないでしょね。校長さんをされて、市の教育委員長されて、教育委員長時代もガンツとして信念を貫かれた。たいがい教育委員長なんかされると、真俗二諦で適当にある程度妥協するという事が本当だと思っけれどもですね、妥協もされないでやって行かれた。これはやっぱり心も不転の位置に立たれたのではないか。こういうように私は考えておるのであります。

こうした「連続性」の問題ですね。これは信楽先生のお書きになった本の中にも「不連続の連続」という言葉を使われておっすね、私はちよつと意を強くしたのであります。

〔「差別」問題を真に担い歩む、社会変革・教団改革へ立ちあがる人間が誕生するためには〕

小武 かなり話が核心部分に迫ってきているかと思えます。ここで次に行けば話がスーッとまた変わってし

まうように思いますので、しつこいようですがいわゆる煩惱具足というような煩惱が起り続け、そしてそれが破られ続け、その関係が変わり続けると。親鸞聖人の言葉で言えば「われら」という、そういう具体性がそこに表れてくると。要するに煩惱が起り続けるがゆえに人間関係の関わりが問い直され変わってくる、そのあたりのことを信楽さん、そして小森さんそれぞれにもう一步突っ込んで語っていただければと思います。

また今日お話しを聞かせていただいたことからすれば、信楽さんにも小森さんにも縁によって差別心が起り続けるんだと、私はそういう身なんだと、こう二人とおっしゃっている事なんです。そういう道理が解った自分は差別心が起らないんだとおっしゃっていない。お二人とも縁によって差別心が起るんだ。しかし、それが破られ続ける事という事でどういう人間関係があらためて出来てきたのか、その点を、もう一言いただきたいと思えます。

信楽 もう時間が来て締めになりそうですから、今の話をお願いしますとね、仏教というものの、今はいろんな事がありますから親鸞さんの所へ引き寄せます。問題は親鸞さんの教えといっても、これ宗教と言うなら

ば「道の宗教」です。「力の宗教」ではありません。「他力」という言葉があるけれどもね、「他力」と言うのはパワーの事ではありません。あれを英語で「パワー」と訳すから話がおかしくなる。

宗教と言うのを大雑把に分けて言えば、一つは「力」の宗教。日本の神道と言うのは「力」の宗教です。だから病気が治るようとか祈願をするわけです。だから拜む対象はいくらあってもいいんです。

ところが道の宗教は、そういう訳にいかないんです。道は一つしかないのですよ。真宗のことを一向宗と昔の人はいった。たった一つの方向に向くと言うのは、道です。それで「道」というのは目標があるのです。どこへ通じるかという目標があるのです。この目標をキチツと真宗は教学的に、あるいは信心の所で立てなければなりません。しかし、この所が曖昧なんです。現代の人々はみんな悩んでいるのです。毎日様々な事でね。子育てに悩んだり、隣近所との付き合いで悩んだり、税金で悩んだり、様々な人間関係の中でいろんな悩みが複雑に絡み合った、その中でいったい我々はどう生きていくべきかと言う、この基本的な人間の生きるべき道が真宗ははっきりしなければならぬ。

だいたい力の宗教は、「宗教なんてあってもなくても良いけども、あった方が良からう。鬼に金棒だ」。そういうレベルで「役に立つ」ということでしょう。しかし親鸞さんはそんな事を言ってません。本当か嘘かです。人間が生きる道は何が本当か、何が嘘か、もうこれしかないんです。この本当のものを求めて生きる道を「真宗」と言っているのです。じゃあ、この「本当」とは何か。それを抽象的に仏様だとか言わないからおかしいんです。そうではないです。「無量寿経」を見たらやつぱり「この世」の所でキチツと言っているのです。四十八願の所でね。四十八願の最初の所に、一番最初に何を言っているか。この世の生きざまの所を語っているのです。第一に「無三悪趣、地獄・餓鬼・畜生のない世界を求める」、そういう国を求める。これ一つ。二番目はそれをひっくり返してね「一度無くなっても再び戻らないように」という願いが、二番目。人間の心のあり様を問題にしているんです。三番目は何を問題にしているのか。これは「悉皆金色、悉くみんな金色に輝く人になる」と言うのです。そして四番目はそれを繰り返してね「無有好醜の願」。

私の理解では、これはね時の浄土教が成立して来

た時に初めの二つは人間の心のあり様を問題にしているんですが、後の二つは社会問題です。

インドと言うのは、いろんな民族が集まっている。だから肌の色の黒いのも黄色も白色もいろんな人がおったんですね。そしてそういう様々な人種のるつぽ、その中でみんな金色に輝く人間になりたい。その綺麗とか、汚い、良いとか、悪いとか、それはもつと言えば差別の問題ですが、「そういうものを無くしたい」という願いです。

そして後に六つ付け足して、最後に十一番目に「みんな仏になるんだ」と。これが阿弥陀仏の浄土の基本構造なんです。これは実は、お浄土が遠くにあるんじゃないくて、今ここにそれをどれだけ映し出すか。本当のものは出来ないけれどもね、その姿をどれだけ水の上に映すように映し出せるかということです。親鸞さんは念仏者の生きざまを「世の祈りに生きよ」といつている。「世の祈り」とは何か、「世の祈り」と言うのは基本的には仏が私たちに示した本願です。私を育てようというその根っこにお浄土がある。私の理解で言うならば真実があるんです。それにどう近づいていくか。

そしてその次の第五願から非常に面白い事を願っ

ておる。一つは「宿命通」、私の生命の源を知る智慧をもつ。次に第六願「天眼通」、みんなの世界が全部見通すような目を持つ。次に第七願「天耳通」、あらゆる人々の声を聞く耳をもつ。第八願「他心通」、他人の心が全部解っていくような力を持つ。第九願「神足通」、「神の足」と書いてありますが、困っている人の所まで飛んで行って、それを助けるような、そういう社会的な働きをもつ。そして最後に仏のさとりをうると。これは実に見事だと思っんですよ。

これは私は我々念仏者が生きていく上で、仏を指し、浄土を目指していく具体的な生きざまがここに語られているように思います。死んでからの話じゃない。これをどう我々が間違ひなくキチツと見つめ続けるか。信心と言うのは羅針盤。私は常に動くだろう。動くけども、キチツと北を指す。念仏者はこの仏の道、浄土の道をどれだけ生きていくか。具体的にはそれを我が身にかけて実践していくか。それを現実化していく。そういう方向に我々の念仏者のありようが語れるのではありますまいか。これは私の基本的な思いで、いつも書いたり言ったりしているのです。願いが大切なんです。道を行くという事は。仏道は願いです。

私ももうこの年になった。「ああ、しんどい」と思っています。「しんどい」と思うんだけど、今日も無理して来ておる。小武さんが言うから。ちよつとも皆さんの役に立つだろうか。しかし、また「お前、何をやっておるか」と、思います。しんどいんだけど、「やっぱりそう生きていかなければならないわ」と、駄馬に鞭打って一生涯、皮をむいて、「脱皮する」。脱ぐという事、脱がなければ成れないのです。たけのこが皮を脱がなければ上へ伸びません。伸びたら皮が剥けるんです。「脱」と「成」の二つは敵しい。

しかし、お念仏を称えて、仏壇にお参りしながら生きるという事は、口はばつたい言い方をすれば、「少しづつ成っておらん私が仏に成る身にお育て頂くことです」、そのように懺悔の中で思っています。

小武 はい、有難うございました。じゃあ、最後に小森さんの方まとめていただければと思います。ことに小森さんの場合は社会への変革という事を担う人間が連続無窮に誕生していくという事への思いもありでしょうし、先ほど論議いただきました煩惱が燃え盛る今という時代だからこそ、そこら辺の展望もお示しいただければというふうに思います。

小森

多少また体験的な事をお話を申し上げて、それから出来るだけ小武さんが話された今日なりの私の結論の方向に近づいていきたいとかように思います。

いま日本の各教団はたいがい差別法名とか、差別戒名を書いたという、そんなものを戒名・法名を付けたという事を恥ずかしく思っています、追悼の法要を教団がやっております。この間も私は浄土宗へ参りました。その少し前には道元禪師の曹洞宗永平寺へ参りました。永平寺へ行つた時の話でありますが一〇〇人〜一二〇人ぐらい一同に僧侶が集まつて来られてですね、お経を上げられる訳ですね。それでなかなか盛大にやつてもらつておるなあ、私なんか勿論解放運動の活動家ですから来賓と言つたような立場、招待者というような立場でそこに参加をした訳であります。何か解らない言葉ですつとお経を上げておられました。しかし、ちよつとうちの浄土真宗と違うなあと思つたのはね、時々言葉が解るんですな。「正信偈」なんか私は小学校の一年生か二年生の折から大人に付いて毎晩「正信偈」を上げておりましたけれども、何の事が解らん、全く解らないですね。僧侶が来て節は教えてくれるんですが、しかし、どういう意味やという事は大人に対して

あんまり話していなかったようですね。だけど、この曹洞宗へ行きましてですね読み上げておる広い意味でお経だと思いますが、「修證儀」と言うのを上げておられたんです。「修證儀」と言うのは後から聞いて解ったんですけれども、道元禪師の言葉の大事な所をコンパクトにまとめたものらしいです。だから親鸞聖人にこれを重ねて、もし説明をすれば「正信偈」に当たる所ではないかと思うんです。ずーっと聞いておいたら私の耳に「いまだ己の渡らざると言えども一切の衆生を先に渡らすべし」。つまりどう言いますかね、汚れた俗界から浄土の方へ渡すという意味ですね。「はほお、なるほど」。自分は一番最後の船に乗るとして先に衆生を船に乗せると、万が一もう一度迎えにこなかったら自分が取り残されるかも解らんけど、先に衆生を向こうの岸に渡す。そういう言い方。これはなかなか優れた、やっぱり仏教の慈悲心と言うか、その所を道元禪師はうまい事を言っておられるなあ、こういうふうにはうまい事です。それで直ぐ思ひ出す事は『無量寿經』第十八願です。つまり「一切の衆生をたすけずんば我は正覚を取らじ」と、「おお、この考え方と等しいな」と、私は思ったのであります。

そこで、実はこれは情けない話なんですけれども、永平寺の管長で曹洞宗のうちで言ったら門主に当たる人ですな。百一歳とか、百二歳とか言われた、何とか禪師と言われておったけれど、その法要が済んでですね、私らのような部落解放運動の活動家と、別の畳の部屋でね僅かの時間お茶を飲みながらちょっと懇談しようという事になったんです。それには私は以前解放同盟の書記長をしてもらったからね。「おお、小森さんも来ておつてすな」というような事だったんです。「ところで小森さん、あなたも国会議員をされておつたんだから、友達がまだたくさん国会の現役におられると思うが、例の「人権のための教育啓発法」を通すように努力して下さい」と、こう言われたんです。「人権のための教育啓発法」と言うのは、ごく簡単に言いましたら、部落解放同盟中央本部が政府・権力に騙されて、「差別は撤廃をしなければならぬ。啓発をしなければならぬ。しかし、その差別というものは差別する者も悪いかも知れないけれど、差別される者も何か問題があるんじゃないかと」という考えにもとずいた啓発をせよという問題のある法律なんです。それで私は万座で恥をかかすのもどうかと思ったから、「禪

師、今日はそれを言うな」と、「ちよつとゆつくりお茶でも飲みましょうや」と言つて、その話を遮つたのであります。

つまりこの日本の人口の一億二千五、六百万人のうちですね、差別されている者はあるいは三百万人かも知れないし、五百万人かも知れないし、あるいは現在頭を出して部落問題と取り組んでおるのは百万少々でしょう。もう圧倒的少数でしよう。「その圧倒的少数の者を『お前らも悪いぞ』と言うような言い方では、それは果たして仏の心に即した者の言い方か」と私はそう言いたいです。「とにかく色々問題あるうが、差別するのはいけない」という事を先ず最初に言つてもらわなはいけませんわ。それなのに国民総懺悔みたいなね感じの法律を、「小森さん通すように努力してくれないか」とこう言つてその曹洞宗の管長が言われたんですよ。それを私は後に中外日報に書きました。そしてそれと同じ趣旨の事を朝日新聞の論壇に書きました。これほど宗教に徹したような人がその辺が解らないのか。無明闇の世界をこの人は行つておるなあと。後に駒沢大学の学長された奈良康明先生と、駒沢大学で私が講演をする時にお会いした訳です。「あんだ

の所の永平寺の管長に言つておいてくれ。こんな事は宗教の水準に合わないではないか。『いまだ己の渡らざると言えども全ての大衆を渡す』という事を道元禪師は『修證儀』の中で言われておるのね、その一番押さえ込まれて差別をされているものが考え直せというような事を言つたんじゃ、宗教の境地じゃないですよ」と。したがつてなかなか本當の仏教の一番大事な所ですね、浄土真宗の教える所からすれば第十八願、『修證儀』では道元禪師が先ほど申した事を言つておる、ここが一番真髓だと思つてあります。そこがどうも忘れ去られるという傾向にあると、これが一つ悲しむ所であります。

さて、現実に話を引き戻すといまして、やはり全ての者が手をつないで一緒に前に前進するという事でなければ私はいけないと思ふんです。同じ浄土真宗でも真宗大谷派に訓覇信雄さんという大変力のある、宗務総長がいらつしやいました。この人がある講演をされた席上で「わしはこの年になつて、もう残り少ない人生だから同和の事やね、靖国の事には関わつておれない。ひたすら清沢満之先生の求められた所を私は歩みたい」、こういう意味の事を言われた訳です。人生の最後だから同和問題とか、

靖国問題に深く心を浸すというなら解るけれど、「この年になつてそんな暇はない、わしはそれをしない。だいたいこの頃おなごが住職にさせると言つて言う者もおるが、これも精神病院なんか行かせなければいけない」とかね、そんな事まで言つておる訳です。その人を私は解放同盟の中央本部に当時の真宗大谷派の宗務総長と一緒に来てもらいました、「訓覇先生、あなたは真宗の教学については私とは月とスッポンほどあなたの方が学識が深い事は私も認めます。しかし、あなたは何かを忘れておられるのではないですか」と。そうしたら訓覇さんが「私は何を忘れてるんですか」と言うから、「それはあなたの気持ちの中にお釈迦さんや親鸞さんが教えて下さった大慈大悲心というものが解つておるようで、ちゃんと腑に落ちていないんじゃないですか。大慈大悲心と言うのは困つておる者と同じ地平に立つて、困つておる者の身になつてものを考えると言うのが大慈大悲心でありませんか。私のようなあなたから見ると若僧がえらい大きな事を言うようだけれども、親鸞聖人という我々を導いて下さつておる宗祖の鏡の前に立つて、あなたはらわたを割つて親鸞聖人に聞いて見なさい」と、こういう事を私

は言つた事があります。そうしたら仏道を歩む者が宗祖の前ではらわたを割つて診てもらえと言われたら、「そんな事はようせん」と言われないので、「そうします」と言われたんです。それから二ヶ月ぐらゐしてまた会う事があつて「どうですか」と言つたら、「いや、やつぱり親鸞聖人の前に立つたら「お前は理屈として知つておるんだけど、本当に大慈大悲心が解つてなかつた」とこゝろ言われた。あれでですね真宗大谷派と我々とのその問題は解決したんです。

私はやつぱり現代社会を支える原理というものがですね、この仏教が教える大慈大悲心、「いまだ己の渡らざると言えども全ての衆生を渡す。一切の衆生を助けずんば我は正覚をとらじ」という立場に少しでも近づいてもらいたいと思います。

皆さん私は現役の運動家として皆さんに訴えたいと思ひますが、何かと言うと今の県教委の姿勢です。徹底的にエリート教育をやるうとしています。定員があつてですね、教室があつて学校の先生もその人数で配置しておるのに、定数内不合格者を出すわけです。たしかにその子どもたちは学力が低いかも知れない。しかし学力の低い子どもも交えて教育をするよ

うでなかったら、本当の意味で学力・生きる力のついた子には育たないのであります。教育の原理と言っているのはそういうものなんです、物事は成就しないんです。一切の衆生を助けるといふ気持ちにならなかつたら。聞けば大変エリートだけ集める学校は、二階、三階にエスカレーターが付いておるとか、エレベーターが付いておるとかという事を聞きます。特別の金をつっ込んでですね「ここはエリート校だ」という事を世間に知らそうと思つてのことでしょう。しかし県教委から見たら田舎の学力が低い者が集まるような学校に対しては、それだけの手だてをしない。そして、「君が代」を歌わないような学校には教員配置をしない。そして地域の人に「君が代」を歌わないから、うちの町の教員配置が悪いので先生らの根性を変えなつたら豊かな教育は出来ない」と、こういう屁理屈をつけさせる方向へ持つていつておるんです。これはもうお釈迦様の教えられる事とか、我らの宗祖である親鸞聖人の教えて下さつてゐる事とか、真正面から違うのであります。

「安芸門徒」という言葉で、「広島は信心が厚い」と、こういうふうにされておるこの地域においてですね、先ずはイジメとか、不登校とか、あるいは定

数内不合格者を出しておるとか、そういう事が数字的に出て来ておる教育の破壊の状況というものは、備後と安芸と比べたら広島という大都会であるだけに広島が一段と教育の水準が低いと。これはやつぱり安芸門徒としてですね、もう一度盛り返さなければいけない。それもイデオロギーでいうのではなく、仏教の教えに基づいたら、それを見逃す訳にはいけないのであります。これが私は大慈大悲心という事を裏うちとした社会性の問題であらうと、こういうふうに思うのであります。

しかし、私らが子どもの時には各学校でびりびり言わせてですね、そして「天皇陛下の御為に」という教育をしてきました。あれから五十年、六十年経つておるんですが、ダテにこの平和の一応戦争のない五十数年を我々は過ごしてきたのではないのでありますから、いま少し仏教の教える主体というものを追求めていつたら、ものの見事に私はまた立派な教育へ、立派な社会の状況に持つていく事が出来るのではないかと思います。

私の父は第五師団に入隊し、敵前上陸の部隊にいましたがた生きて帰るのは帰りましたけど、再び父親の顔を見ない子どもたちもたくさんおつた訳です。

そういう時代の教育のつまり狙う所をです、今また狙おうとしておると。これは殺生を強く戒める仏教の教え、とりわけ浄土真宗の教えに反する事であると思います。安芸門徒はやはりその辺を深く考えて信心に生きると言うならば、その社会性という事を考えていくべきではないか。必ずしも悲観すべき事ばかりではございません。樂觀してもおられませんが、しかし今の時期はその所が大変問題ではないかというような事を思います。この辺が私の今日の結論です。

小武 お二人の方にお話をいただきまして、自らの心の上に差別心・煩惱が起こつてくるという事から、最後には煩惱によつて、差別心によつて作られている、また強化されようとしている現実のそうした社会の状況、それを批判していく、破つていく主体在り方についてお話いただきました。そして自らの差別心が破られて行くという事は、現実の私たちの生きてある社会の差別的な状況を破り続け、人間関係の变革、ひいては社会構造の变革へと結びついていくという事を信楽さん、小森さん、お二人のお話の中で示していただいたかというふうに思います。

本当にどうもありがとうございました。

主 催 「小森龍邦さんの対談を聞く会」

協賛団体 同朋三者懇話会（浄土真宗本願寺派安芸教区・備後教区、部落解放同盟広島県連合会）。同和問題にとり

くむ広島県宗教団連絡会。真宗大谷派山陽教区同和協議会。広島部落解放研究所宗教部会。小森たつくにさんを励ます宗教者の会

（呼びかけ発起人）

浄土真宗本願寺派 代表信楽峻磨／（安芸）藤澤柱珠・谷下左近・沖 和史・岡部宗雄・近藤一也・菅瀬融爾・満井秀城・圓山龍溪・城山大賢・武田敏弘・岩崎智寧／（備後）佐々木至成・原田淳誠・田坂英俊・季平恵海・真澄瑛智・竹政信隆・季平博昭・藤井宜之・毛利慶典・深水純司・山名孝彰／（山陰）菅原龍憲／（山口）嘉屋英嗣・長岡裕之／（四州）随行未千／日本キリスト教団 東岡山治／真宗大谷派 長坂公一

（事務局）

〒七三二—三三五二

広島市安佐北区安佐町大字後山二五〇一

藤井 聡之 ☎〇八二—八三八—一〇三二

〒七二八—〇〇〇三

広島県三次市東河内町二三七

小武 正教 ☎〇八二—四一六—三七八—〇四二